

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 16 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370436

研究課題名(和文) 日本手話の述語のアスペクトと否定表現

研究課題名(英文) Aspectual properties of predicates and negative sentences in Nihon Shuwa (Japan Sign Language)

研究代表者

原田 なをみ (HARADA, Naomi)

首都大学東京・人文科学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：10374109

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本手話のアスペクトに関して、以下の3点に関する調査および分析を行った。(1)日本手話の述語のアスペクトの基本的特性を統語及び語彙の意味から分析する。(2)日本手話の状態述語：特に「いる」/「ある」の交替と文主語の有生性を中心に調べる。(3)日本手話の否定表現：各アスペクト群においてどのように表現されるかを解明する。分析の結果、日本手話の述語の語彙アスペクトも、音声言語の語彙アスペクトと基本的には同様の分析が可能で、一見日本手話に特異と思われる現象は、特定の意味素性の指定の違い、およびジェスチャーというモダリティに依拠することを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In this research project, we investigated the following:(i) The syntactic and semantic characteristics of the aspectuality of the predicates of Nihon Shuwa (Japan Sign Language) (ii) The existential construction in Nihon Shuwa, with particular focus on the predicate alternation pattern and its relation to the semantic feature specification of the existential predicate (iii) The negation in Nihon Shuwa - how it interacts with the aspectual properties of the predicates. The results of the investigations show that the aspectual properties and patterns of negation of Nihon Shuwa, a language with gesture modality, fall within the limits of the framework of Universal Grammar, with apparent deviations stemming from the particular modality and the choice of the semantic features that trigger particular syntactic phenomena.

研究分野：統語論

キーワード：言語学 日本手話 統語論 意味論 語彙アスペクト 否定表現 語順決定

1. 研究開始当初の背景

従来の手話言語の類型的な研究では、主に非手指表現と手指表現の関連に着目して否定表現の研究が進められており、音声言語において考慮されている、述語の語彙アスペクトと否定表現との関連（例：中国語の二つの否定辞「不」と「没有」は、述語の語彙アスペクトに応じて使い分けられている）に着目した研究はほとんど見られなかった。また、手話言語の語彙アスペクトに関しても、個々の手話単語の手型の位置（保持・反復表示など）・場所・非手指動作の有無といった、音声言語との比喩で表現すると「音韻的」な特徴は観察されているが、Vendler (1967) や金田一 (1976) の分類に相当するような動詞および述語の類型をふまえた包括的な研究は、手話言語の領域において未だ成されていなかった。[a][b]

日本手話のアスペクトに関する先行研究 [c] [d] は、「語彙的アスペクトの同定を行った上での考察とはなっていない」という指摘がある。一方佐伯 (2003, 2004) は主に金田一の分類に依拠し、「過程性」と「継続性」というアスペクト特性を独自に立てて考察を進めている。[e] [f]

先行研究は日本手話のアスペクトに関わる現象の記述と分類に貢献したが、そこには2つの問題点がある。まず、日本手話のアスペクト分類の研究では、「過程性」や「継続性」など、分類区分が音声言語の研究で前提とされているものとは異なっており、手話言語においても音声言語と同様のアスペクト分類、例えば Vendler の四分類のような区別に従って述語のアスペクトの分類が可能かどうかはこれまで明確に論議されてきていない。また、Vendler の四分類に依拠し日本語と日本手話を併用して直接日本手話母語話者に容認度を尋ねる先行研究の手法は、質問者側の日本語による質問が誘導尋問のようになってしまい、質問に合わせた回答になってしまう場合があり、満足の行く結果が得られない。

本応募者は長らく主に日本語・英語・中国語を対象としたアスペクトと動詞句の研究を行ってきた。[g], [h] また、日本手話母語話者のアスペクトに関する言語知識の調査を平成24年8月に実施している。[i] 応募当初ではこの収録データの一部のみの分析に留まっていたので、有益なデータの更なる分析、および追加データ収録が手話言語の文法(母国語話者が持つ言語知識)の解明に必要であった。

2. 研究の目的

音声言語と手話言語では、音声と手指および表情といった様式の違いはあっても、言語活動時に使用している脳の部位は同じであり、普遍的な言語知識を用いていると考えられる。そのため手話言語も音声言語同様、動詞の種類に応じて異なるアスペク

ト特徴を示すことが予想される。その予想はイスラエル手話の達成動詞と手形 ALREADY の共起可能性について一部実証されている。[i] 研究代表者は既に日本手話のアスペクトのデータ収録を行っており、達成動詞の一部（“落ちる”）が他の達成動詞とは異なり、完了を表す手話表現との共起ではなく、その動作によって影響が生じる目的語がどうなるかを表す状態述語と不可分、すなわち複合述語であることを明らかにしていた。[j] その成果をふまえて、本研究課題では、適切な調査方法を用いて、以下の三点を明らかにすることを目標とした。(1) 既存のデータの分析の完了、および達成動詞の中のアスペクトによる下位分類の追加調査 (2) 既存の手話言語の研究では十分解明されていない、手話言語の述語の語彙アスペクトによる分類と分析 (3) 語彙アスペクトと密接に関わる否定表現の分析

3. 研究の方法

手話言語の否定表現の表出の調査は、インタビュー形式で実施すると、手話話者が調査者の意図に反して、問いに単なる首振り（否定のジェスチャー）で回答する可能性が高い。否定のジェスチャーによる回答を可能な限り回避するため、本研究では、次の二つの手順を取った。まず、平成25年度では、パイロットとして日本語の文を日本手話の母語知識提供者（以下「協力者」と記述）に提示し、日本手話ではどのように表出されるかを確認した上で、本収録として絵カード・絵本からの抜粋・動画サイトの無料動画などを提示して、意図している構文に近い文の表出を促した（手順1）。平成26年度・27年度では、絵本を利用した手話表現表出を実施した。質問者と手話通訳者が組になり、『桃太郎』『浦島太郎』『かちかち山』『シンデレラ』など、有名な昔話の絵本を10冊程度準備し、協力者に一冊ずつ渡して読んでもらい、その内容を手話で表出してもらった（手順2）。平成25年度-27年度を通して、各セッションは約1時間で、協力者の承諾の元、ビデオカメラに収録した(本収録2件、40代男性1名、70代女性1名)。収録した映像データの中から、否定にまつわる表現を中心に書き起こし、意味解釈はCODA話者(手話話者を両親に持つ健聴の40代女性1名；日本語および日本手話を母国語としている)に確認した。

4. 研究成果

(1) 平成25年度は、Vendlerの述語アスペクトの四分類に基づく分類では「状態述語」にあたる、存在の表現「いる」「ある」に着目して研究を行った。音声言語において、一部の言語では、存在文の主題となっている名詞句と述語の間に、ある特性において一致現象がみられる場合がある（例：日本語（優生性の一一致）「そこにネコが{○いる/×ある}」・「机の上に本が{×いる/○ある}」）。一方、手話

言語の存在文では、従来「文法的に規制される述語の交替はみられない」という観察があった。[k] 可視的なモダリティを使用する日本手話において、存在を表す述語は「いる」（両手を握って両腕をハの字状にし、下方に動かす）や「ある」（片手を上げて下方に動かす）が用いられることが知られているが、両者がどのような意味的・統語的な条件の元に使用されているのかに関して、これまで体系だった研究は存在しなかった。そこで日本手話の存在文はどのような形式で現れるのか、二種類の存在を表す述語の分布はどのようなになっているのかという点に関して、体系だった研究を試みた。

前項に説明した手順1を用い、存在を表す文を表出するようなイラストや動画を用いて日本手話母語話者にインタビューを実施した。調査の結果、「いる」のみが可能だった例は（ア）～（ウ）のような文である。

①「いる」のみ可能な例：

- (ア) 子供 公園 {a. いる/b. *ある}
- (イ) テーブル 下 ネコ {a. いる/b. *ある}
- (ウ) カラス 屋根 {a. いる/b. *?ある}

これらの文は、一見日本手話でも日本語同様、主語の有生性と述語の形が呼応していることを示唆するように見える。しかし、(エ) (オ)に見るように、「いる」と「ある」のどちらも可能な文も存在した。

②二種の述語が（一見）可能な例：

- (エ) 水族館 魚 {a.いる/b.ある}
- (オ) 北海道 熊 {a.いる/b.ある}

①・②の違いを明らかにするため確認してみると、(エ)に関しては「水族館には魚がいるに決まっているため、(エa)のような表現はそもそもおかしい」という説明があった。

(エa)で「いる」が自然になるためには、「何か特別な事、普通でないこと」、例えば「珍しい」という表現が必要ということが明らかになった：(カ)。

(カ) 水族館 魚 #^(珍しい) 10 m 大きい 魚
いる いる いるいる

また(オ)では「いる」と「ある」で解釈が異なる。(オa)「いる」は(日本の)クマの一般的な性質であるが、(オb)「いる」ではテレビなどで見たある特定の場面が手話話者の念頭にあり、必ずしもクマ全般の性質について述べているわけではない。

この調査で得られた、日本手話の存在文の特徴をまとめると次のようになる。日本手話では、「いる」「ある」の述語の交替は(音声言語の日本語同様)存在し、かつ、従来の手話言語の存在文の研究の主張と異なり、交替を誘発するのは、「その文が主題の名詞句の恒常的な属性を表しているか否か [1]」という、

文法的な特性であることが明らかになった。

(2) 平成26年度は、日本手話の否定表現の解明を目標とした。手話言語において、比較的語彙数の少ない否定の非手指表現に比べ、否定の手指表現は多数存在する。[m] 手話言語では、否定表現が表出される際、手指表現に加えて口形などの非手指表現も共起することが多いが、その表出の義務の度合いは言語によって異なる。これまでの研究では、否定文表出の際に非手指表現が義務的に表出されるか否かという要因に関わるパラメータを提案され、前者の言語（非手指表現の表出が義務的な言語；アメリカ手話など）を非手指表現優位型 (non-manual dominant)、および後者の言語（日本手話など）を手指表現優位型 (manual-dominant) と呼んでいる。[n] さらに、(1a)の非手指表現優位型の手話言語が手話言語の中で多数を占めていると述べている。[n] 実際、手話言語の否定表現に関する諸現象 (negative concord, doubling of negative sign, emphasis through negation, etc.) は、アメリカ手話言語など、非手指表現優位型の手話言語に基づいた研究が大半である。手指表現優位型の手話言語における否定表現の研究は、基本的な例文の研究を除くと、それほど多くはない。

手指表現優位型である日本手話における否定表現の先行研究のうち、基本的な否定語として「しない」・「ない」・「違う」の三語が着目されてきた。[o]

- ①「ない」両掌を回転するようにひらひらさせる
- ②「しない」掌を左右に振る
- ③「違う」利き手の親指と人差し指をL字状にし、ひねるように回転する

おそらく音声言語の機能範疇に相当する非手指表現と異なり、手話の語彙表現としての否定語は使用例も多数存在し、定義づけも一定でない。上記「ない①」「ない②」については、概ね前者は事象の否定、後者は必要・意思などモダリティの否定と観察されているが、③「違う」に関しては、「メタ言語的否定を表す否定語」[o] “Japanese Sign Language (NS) has a specialized manual negation to refute a specific aspect of a previous utterance: DIFFER” [m]というように、従来談話的な否定表現と捉えられてきた。

しかし、「メタ言語的否定」という概念自体、既存の文法理論においてどのような意味を成すのか明確ではない。たとえば日本手話には次のような例文が「名詞や形容詞を否定する」、すなわち「ない①」や「ない②」と同様の否定語として扱われている。[p]

- (ア) a. /私/学生/違う/私は学生でない'
b. /彼/佐藤/違う/
'彼は佐藤さんではありません'

(イ) /晩ご飯/カレー/違う/
'晩ご飯はカレーではありません'

(ア)においては、「違う」は直前の名詞「学生」「佐藤」を否定しているように見えるし、(イ)では「晩ご飯がカレー」という命題、あるいは「カレー」という名詞を否定しているように見える。この例を見る限り、「違う」は基本的な否定辞「ない①②」と同様、統語構造においてその作用域にある要素を否定しているように見える。日本手話の「違う」が"メタ言語的否定"なのか、それとも統語における否定語/機能範疇としての性質を持つのかどうか、データ自体も少なく、既存の文献に依るのみでは判断は難しい。こうした背景をふまえて、日本手話の「違う」および否定に関する表現の調査を実施した。

調査の手順は、前項の手順2を用いた。その結果、次の3点の特徴が明らかになった。

- ④ 直前の名詞の否定
/まず/サル/違う/PT/
'まずサルが、いや違う' [桃太郎]
- ⑤ 命題の否定
/鳥/来た/違う/
'キジが来た、いや違う' [桃太郎]
- ⑥ 手形に表出されていない要素の否定
/違う/PT/
'(自分が知っている話しと) 違う'
[物語の感想]

上記データから、日本手話の「違う」は通常自然言語に見られる否定辞のように、直前の要素(少なくとも名詞・命題)を否定するということが明らかになった。また、文中に手形で表されない要素の否定も担うことが明らかになった。⑥のような例は、おそらく *pro* (音形を持たない代名詞) を含んだ構造を持ち、否定辞「違う」はその代名詞 (の指示内容) を否定していると思われる。

(3) 平成27年度は、(1) で達成した、日本手話の述語の語彙アスペクトの基本的分類に基づき、日本手話の述語の語彙アスペクトの特徴として顕著である「A-B-A型構文」について詳細に調べた。手話言語で「A-B-A」の形で述語複合体が形成され、特定のアスペクトを表すことは、アメリカ手話言語 (ASL) では既に観察されている。ASLには、話題化のように特定の要素が談話上の要請により特別な位置に動くような構文以外にも、基本語順と異なる語順を示す「サンドイッチ構文 (verb sandwiches)」が存在する。[q]

(ア) アスペクトタイプのサンドイッチ構文
STUDENT NAME S-A-L-L-Y [TYPE] HER
PAPER [TYPE] [asp:cont]
'Student named Sally was typing her term paper.'
(イ) 語彙タイプのサンドイッチ構文
H-A-R-O-L-D [SWEEP[shape_{cj}:B]] FLOOR

[USE-BROOM-AROUND][handle_{cj}:S-on-S:pl]

location]

'Harold sweeps up the floor (with a broom).'

(ア)は「SVOV」、(イ)は「SV1O(Adv)V2」の形式を取っている。これらの例文において、枠で囲った箇所 (動詞) は文中に二度現れており、その間に現れる要素は表層の語順において挟まれており、「A-B-A」の形式を見せる構文である。

一方、従来の日本手話の研究においては「A-B-A」の語順を見せる構文の有無は明らかではなかった。前項手順2によって得られたデータの分析の結果、日本手話にもA-B-A型構文が存在することが明らかになった。日本手話のA-B-A型構文の特徴は、以下の通りである。

① 特定の品詞・アスペクトに限定されない述語の種類・元々の数の違いによりばらつきが見られるが、(ウ)-(カ)が示すように、どのアスペクトもA-B-A型で表出され得る。以下、日本手話の文のA-B-AのAに相当する部分には[]、Bに相当する部分には波下線を付す。日本語訳は日本手話の逐語訳から大きく異なる場合にのみ付す。

- (ウ) 活動動詞:
[二人一緒に楽しく踊る]-ダンス-[二人一緒に踊る] [シンデレラ]
- (エ) 達成動詞:
[持ってくる]-家-[持ってくる]
"家に桃を持ってくる" [桃太郎]
- (オ) 到達動詞:
["これだ!"] (と気づく)-靴-拾い上げる
-[「これだ!】 (と気づく)] [シンデレラ]
- (カ) 状態述語:
[居た]-私-さっき-手伝った-締め上げた-二人-[居た]
"私がさっきコルセットを締め上げて (着替えを) 手伝った 二人がいた"
[シンデレラ]

また、A部が受動態の例 (キ) や、直接話法の例 (ク) も見られた。

- (キ) [殴られる]-鳥に-[殴られる]
"鳥 (=キジ) に (鬼が) やっつけられる"
[桃太郎]
- (ク) ["おかしい"]-父・母-[「おかしい」]
" (王子の) 父母が「おかしい」思う"
[シンデレラ]

(ウ)-(カ)のデータは、この構文が動詞の種類、とりわけ状態性に関わらずに幅広くみられることを示している。さらに (キ)-(ク)のデータは、日本手話のA-B-A型構文はASLと異なり、動詞に限られないことを示している。

② 二つのAの形が一致している必要はない
(ケ) (コ) に見られるように、二つのAは必ずしも同一の形式・語彙項目である必要はない。

(ケ) A-B-A' :

[攻撃 (両手)]-戦う-[攻撃 (片手)]
“攻撃して戦う” [桃太郎]

(コ) A-B-A' :

[コルセットを引っ張る]-手伝い-[コル
セットを締め上げる-結ぶ] [シンデレラ]

③ 多数の事象を含み得る

上述の(ウ) (エ)は B 部が名詞で、A 部に含まれる述語の表す事象の一部であると考えられるが、(オ)は「気づく」と「靴を拾い上げる」という二つの述語を含んでおり、1 つの文で二つの事象が表されている。

④ A-B-A ≠ B-A-B

(サ) に見られるように、A-B-A型構文でAとBを入れ替えることは不可能である。

(サ) a. [現れる]-CL蓋を上げる-蛇-[現れる]

b. *[CL蓋を上げる]-現れる-[CL蓋を上げる]
[舌きり雀]

⑤ Aは二つとも統語的主要部である

(シ) に示したように、日本手話と似たようなA-B-Aの型が見られる中国語 (音声言語) の verb copying構文では、(ス)の例文の対が示すように、片方のA (動詞) にしか否定辞がつき得ない。

(シ) (subject) V Direct Object NEG V adverb

(ス) a. wo pai shou mei pai liang-ci

I clap hand NEG clap two-CL

‘I didn't clap my hands twice.’

b. *wo mei pai shou pai liang-ci

否定辞がつく方の動詞が本動詞で、否定辞がつかない方 (左方/上方) の動詞は副詞的要素と考えられる。

一方、日本手話のA-B-A型構文では、どちらか片方のみに否定辞をつけることは不可能である。

(セ) a. *[行く-ない]-戦争-[行く]

b. *[行く]-戦争-[行く-ない] [桃太郎]

調べた範囲の日本手話のデータにおいてはA-B-A型構文の「A」部に否定辞が入っている文は数多くはなかったが、見られた場合は(ソ)に太字で示したように、動詞の複数の実現形のすべてに否定辞がついていた。

(ソ) [PT1PL-なかなかできなかつた]-子供
いない-[PT1S-なかなかできなかつた]

‘私たちにはなかなか子供ができず、子供がいない。’ [桃太郎]

このことは、日本手話のA-B-A型構文の「A」に当たる部分は、copy、あるいは移動といった統語的な操作によって片方の実現形が得られた構文と異なり、どの実現形も本動詞であるということを示している。

上記5つの特徴を踏まえると、日本手話のA-B-A型構文の場合、ASLの同様の構文で提案されている「動詞繰り上げ」の分析は適用不可である。動詞繰り上げに依らずに日本手話の文法ではどのようにA-B-A型の語順が可能になるかに関して、原田・高山 (2015) では、統語構造を表出する際に行われる線状化のアルゴリズムによりA-B-A型の文系が算出されることを示した。[5節②]

(4) 研究期間内全体を総括すると、従来明らかにされていなかった、日本手話の述語の語彙アスペクトに関して、音声言語の述語の基本的な分類 (Vendlerの四分類) が日本手話でも当てはまることを示した。一見音声言語とは異なるように見える特質も、交替に関わる素性の違い (4節 (1))、および線状化のアルゴリズムの違い (4節 (3)) として捉えることが可能であることが明らかになった。また、日本手話の否定表現に関しては、従来メタ言語的と捉えられていた語彙 (「違う」) も、音声言語の否定辞同様の性質を持つことを示した (4節 (2))。以上のことから、モダリティの違いのため、一見大きく異なる性質を持つように見える音声言語と手話言語の文法も、普遍的な文法理論の枠組で扱えることが語彙アスペクトの面にて解明し、一般的な言語理論に貢献した。また、手話研究においても、従来の手話言語の観察とは異なる日本手話のデータを記録・分析し、手話言語の統語構造の解明に貢献した。

<引用文献>

[a] Vendler, Zeno. 1967. *Linguistics in philosophy*. Ithaca, NY: Cornell University Press.

[b] 金田一春彦. 1976. 国語動詞の一分類. 金田一春彦 編, 日本語動詞のアスペクト, 5-26. 東京: 麦書房.

[c] 米川明彦. 1984. 手話言語の記述的研究. 東京: 明治書院.

[d] 市川恭弘. 2005. 手話の言語学 5 時間・空間と手の運動. 月刊言語 34:5, 92-99.

[e] 佐伯敦也. 2003. 日本手話における語彙的アスペクチュアリティ -- 「過程性」と「継続性」をめぐって -- 第29回日本手話学会大会予稿集, 6-9.

[f] 佐伯敦也. 2004. 日本手話における語彙的アスペクチュアリティ -- 「過程性」から見た品詞 -- 第30回日本手話学会大会予稿集, 32-35.

[g] Harada, Naomi. 2000. A parametric approach to intransitive verbs. *The Proceedings of ESCOL '99*, 83-94. Ithaca: Cornell University CLC Publications.

[h] Harada, Naomi. 2007. Ditransitive Sentences: A View from the East. 2007中日理論言語学研究国際フォーラム論文集, 259-266.

[i] Meir, Irit. 1999. A perfect marker in Israeli Sign Language. *Sign Language & Linguistics* 2:1, 41-60.

[j] 原田なをみ・高山智恵子. 2012. 日本手話の達成動詞の完了表現に関する一考察. 日本言語学会第145回大会予稿集, 70-75.

[k] Pichler et al. 2008. Possession and existence in three sign languages. In TISLR9, 440-458.

[l] Carlson, Gregory. 1977. Reference to kinds in English. Doctoral dissertation. University of Massachusetts, Amherst.

[m] Quer, Josep. 2012. Negation. In Pfau, Roland, Markus Steinbach, and Bencie Woll, eds., *Sign language: An international handbook*, 316-339. Berlin: Walter de Gruyter.

[n] Zeshan, Ulrike. 2006. Negative and interrogative constructions in sign languages: A case study in sign language typology. In Zeshan, Ulrike, ed., *Interrogative and negative constructions in sign languages*, 28-68. Nijmegen: Ishara Press.

[o] 市田泰弘. 2005. 「手話の言語学(11) 文法化—日本手話の文法(7)「助動詞、否定語、構文レベルの文法化」」『月刊言語』第34巻第11号, 88-96.

[p] 岡典栄・赤堀仁美. 2011. 文法が基礎からわかる日本手話のしくみ. 東京: 大修館書店.

[q] Fischer, Susan, and Wynne Janis. 1993. Verb sandwiches in American Sign Language. In Siegmund Prillwitz and Tomas Vollhaber, eds., *Current trends in European sign language research*, 279-293. Hamburg: Signum-Verlag.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- ① HARADA, Naomi, Two notes on sign language research, 人文学報、査読無、Vol.512-6, 2016, 29-37
- ② 原田なをみ、高山智恵子、日本手話の語順決定、日本言語学会第151回大会予稿集、査読無、Vol.1, 2015, 164-169
- ③ 原田なをみ、高山智恵子、日本手話の「違う」：手指表現優位型の否定表現、日本言語学会第149回大会予稿集、査読無、Vol.1, 2014, 182-187
- ④ 原田なをみ、高山智恵子、日本手話における「いる」「ある」交替と叙述の種類、日本言語学会第147回大会予稿集、査読無、Vol.1, 2013, 278-283

[学会発表] (計 6 件)

- ① 原田なをみ、高山智恵子、日本手話の語順決定、日本言語学会第151回大会、2015年11月28日、名古屋大学(愛知県名古屋市)
- ② 原田なをみ、理論言語学の諸相、認知的コミュニケーションワークショップ2015、招待講演、2015年9月29日、ヤマハリゾート(静岡県掛川市)
- ③ 原田なをみ、高山智恵子、日本手話の「違

う」：手指表現優位型の否定表現、日本言語学会第149回大会、2014年11月15日、愛媛大学(愛媛県松山市)

- ④ 原田なをみ、理論言語学：概念と研究紹介、認知的コミュニケーションワークショップ2014、招待講演、2014年9月23日、松風園(愛知県蒲郡市)
- ⑤ 原田なをみ、高山智恵子、日本手話における「いる」「ある」交替と叙述の種類、日本言語学会第147回大会、2013年11月23日、神戸市立外国語大学(兵庫県神戸市)
- ⑥ 原田なをみ、認知科学としての理論言語学、認知的コミュニケーションワークショップ2013、招待講演、2013年9月24日、ZEN HOLDINGS 伊豆山研修センター(静岡県熱海市)

○出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等
Naomi Harada's Web Page
http://www.comp.tmu.ac.jp/ling_syn/

6. 研究組織

(1)研究代表者
原田なをみ (HARADA, Naomi)
首都大学東京・人文科学研究科・准教授
研究者番号：10374109

(2)研究分担者 なし
()
研究者番号：

(3)連携研究者 なし
()
研究者番号：

(4)研究協力者
小藪江 聡 (Osonoe, Satoshi)
平 英司 (TAIRA, Eiji)
高山 智恵子 (TAKAYAMA, Chieko)
高山 靖子 (TAKAYAMA, Yasuko)